

幻化網タントラの曼荼羅

木村秀明

『幻化網タントラ (Mayajalāntara)』とは、日本密教が所依とする『金剛頂経 (Tattvasaṃgraha)』と、父系無上瑜伽タントラの代表的經典である『秘密集会タントラ (Guhya-saṃgraha)』との中間に位置する經典であり、およそ八世紀ごろ成立したと思われる。当経の梵文原典は未発見であり、漢訳(一本)と藏訳(二本)が残されている。漢訳は至道元(九五)年に法賢(一〇〇〇年)によって『仏説瑜伽大教王経』五卷(大・一八卷・No.896)として訳出された。藏訳には新・旧二訳があるが、新訳のリンチェンサンポ (Rin chen bzang po) 訳『Mayajalāntara-nāma』(北京, No. 102)の方が、内容的に旧訳(ニンマ派の伝統に属する)よりも古く、かつ漢訳と対応することが、松長有慶博士により報告されている。よって当面は漢訳に藏訳の新訳を対照させる。

漢・藏両訳とも十品より成り、四十一尊よりなる曼荼羅、

灌頂(第一阿闍梨灌頂のみが説かれる)、曼荼羅の諸尊及びそれ以外の諸尊による各種の成就法、印契の組み方、真言等が説かれる。漢訳と藏訳とは、全体の構成・章立て等は完全に一致し、内容も概して非常によく一致する。ただし、文章の構造や内容の細部において、翻訳によって生じたもの以上の相違がみられる。

これらの他に、漢訳には、『幻化網大瑜伽教十忿怒明王観想儀軌経(十忿怒軌)』一卷(大・一八卷、No.891)という『幻化網』の名を冠する小部の經典がある。この『十忿怒軌』は、やはり法賢によって訳出され、Yamantakaを始めとする十忿怒尊による成就法を説く。この内の八忿怒尊は、『幻化網タントラ』の曼荼羅において四方四隅を守る守護尊であり、その記述内容もほとんど『幻化網タントラ』の第四品と第五品の文章を繋ぎ合わせて出来ている。猶、この部分を詳細に比較すると、『十忿怒軌』は漢訳よりはむしろ藏訳により近いものであることが判る。

この他に、当タントラの曼荼羅を考察する上で参照すべき資料として、時代は多少新しくはなるが、『Nispannayogāvali (NSP)』がある。この『NSP』は、十二世紀にマハヤーカーラグプタ (Abhayakaragupta) によって編まれたもので、当時流布していた二十六種の曼荼羅の概要を簡潔に記したものである。この中の No. 20 ではマインジュウヴァジュラ曼荼羅 (Mahajvajramandala) が説かれ、これは『幻化網タントラ』を所依とするとする。この『NSP 20』は、一部においてより発展した形態を示すが、大部分において『幻化網タントラ』の曼荼羅にかなり良く一致する。

二

当タントラの曼荼羅は、三重の構造を持ち、第一院には金剛界曼荼羅と同様に毘盧遮那を中尊とする五仏が位置するが四方の四仏に *Buddhalocana*・*Mamakī*・*Pāṇḍarā*・*Tara* の四明妃を配する。この四明妃は『秘密集会タントラ』の曼荼羅を特徴づけるものとして知られている。又、『幻化網タントラ』の諸尊はすべて多面多臂の密教的尊形を持ち、中尊の毘盧遮那と東方の阿閼と西方の無量寿の三仏(仏部・金剛部・蓮華部の主尊)は、配偶者としての明妃を抱いている。宝生と不成成就については、明妃に関する明確な記述がない。『NSP 20』になると、中尊が *Mañjuvajra* に変わるとともに、第一

幻化網タントラの曼荼羅(木村)

院では宝生と無量寿の尊形だけが大幅に変化し、明妃を伴うことが明記される。ここに三部から五部への発展の足跡を見ることができよう。猶、中尊の *Mañjuvajra* は、毘盧遮那の自性を持つとはされるが、その尊形は第三院に位置する妙吉祥 (*Mañjuśrī*) が金剛界明妃 (*Vajradharyāvarā*) を抱いた姿に他ならない。

第二院には、金剛界曼荼羅の四波羅蜜に対応する薩埵金剛 (*Satva vajra*) 等の四明妃に、*Cunda*・*Rāmaloka*・*Bhṛkṛt*・*Vajrasūkhala* の四明妃を合わせた八明妃が配せられる。薩埵金剛等の四明妃に関する説明は極めて簡単で、阿閼等の四仏に似ている(但し明妃は伴わない)とするのみである。これに対して残りの四明妃は尊形が詳細に説かれ、この中でも *Cunda* と *Bhṛkṛt* は『幻化網タントラ』において特に重要視されている。「第五真言大智变化品」においては、第一院の四明妃並びに第三院の八忿怒尊と共に、この二明妃による独立した成就法が説かれる。猶、この第二院の八明妃は『NSP 20』の説明とも一致する。

第三院には、慈氏 (*Maitreya*) や前述の妙吉祥等の十六大菩薩が四方に配される。このうちの十二菩薩は、金剛界曼荼羅の十六大菩薩の中にその名前を見い出せる。しかし、『幻化網タントラ』ではこれらの菩薩は多面多臂の密教的尊形となり、慈氏と妙吉祥以外の十四菩薩の尊形は極く簡略に記され

るにすぎない。

第三院にはこの他に、前述の如く四方四隅の守護尊として八忿怒尊(東 Yamantaka・南 Prajñāntaka・西 Padmāntaka・北 Vighnāntaka・北東 Acalaṅkha・南東 Takkirāja・南西 Nīlādāya・北西 Mahabala)が配られる。『NSP 20』では、上方の Sumbharāja と下方の Vajrapātāla の二尊が加えられ十忿怒尊となっている。⁽⁵⁾『十忿怒軌』も、方向こそ記していないが、この十忿怒尊を『NSP 20』と同じ順序で説き、上下二尊の尊形も一致する。『秘密集会タントラ』の曼荼羅においても十方を守る十忿怒尊が説かれる。しかし、上方の Sumbharāja は下方に移り、上方には Uṣṇīśacakra-vartin が配られる。

『幻化網タントラ』に於いても、上下の守護尊としてはないが、「第四三摩地品」では八忿怒尊の直後に Uṣṇīśacakra-vartin の尊形とその三摩地が、「第五真言大智变化品」では Vajrapātāla と Sumbharāja とによる成就法が説かれている。猶、Vajrapātāla と Sumbharāja とは、本来地底に関わる同一の神格であり、「第五品」の記述においてもこの二尊は完全には分離独立していない。即ち、八忿怒尊のグループは固定されているが、上下の二尊は固定されておらず尊が入り乱れて登場する。『幻化網タントラ』では、これらを十忿怒尊として組織化することなく、八忿怒尊の直後に雑然と三尊が説かれる。『NSP 20』と『十忿怒軌』は、本来地底に関わ

る Sumbharāja と Vajra-pātāla とを選び十忿怒尊にまことめ上げた。恐らく「pātāla」という語が地底を意味する故に、Sumbharāja が本来の性格とは反対の上方に回されたと思われる。これに対し、『秘密集会タントラ』は、Vajrapātāla の代わりに Uṣṇīśacakra-vartin を選んだため、Sumbharāja が下方に来たと思われる。

八忿怒尊に関する『NSP 20』の説明は、『幻化網タントラ』及び『十忿怒軌』が説く尊形とよく一致するが、西方の Padmāntaka (別名馬頭 Hayagrīva) とだけは大幅に相違する。その代り、同じアバヤーカーランプタの編になる『Sādhanamālā (SM⁽⁶⁾)』の No. 259 の『Hayagrīvasādhanā』が、『幻化網タントラ』の第三品及び『十忿怒軌』の Padmāntaka の尊形を説く文に対応する。猶、この『SM 259』は、漢訳よりは蔵訳『幻化網タントラ』及び『十忿怒軌』により完全に対応する。

1 詳しくは拙稿「幻化網タントラにおける曼荼羅」(『豊山教学大会紀要』第一六号、昭和六三) 2 松長有慶「幻化網タントラの性格」(印仏研 8-2) 同「密教經典成立史論」宝蔵館、昭和五五 3 B. Bhattacharyya, GOS, No. 109, Baroda, 1949. 4 前掲拙稿付図 I 参照 5 『NSP 20』では、上方を守る別の尊として Uṣṇīśacakra-vartin も説く 6 B. Bhattacharyya, GOS, No. 41, Sādhanamālā Vol. II, Baroda, 1928

〈キーワード〉 『幻化網タントラ』マンダラ、(大正大学総合仏教研究所研究員)